

第8回キャリアパス・男女共同参画委員会企画セミナー 「理系学生のための2020年代のキャリアパス」 開催報告

第8回キャリアパス・男女共同参画委員会企画セミナーが、2021年9月22日にオンライン（Zoom）で開催された。今回は、「理系学生のための2020年代のキャリアパス」と題して、Ph.D.取得後の理系出身者にとって、公的研究機関（大学・研究所等）における研究職以外にどのようなキャリアパスがあるのかについて理解を深めることを目指した。上坂充氏（内閣府原子力委員会委員長）、水戸晶子氏（文部科学省初等中等教育局情報教育・外国語教育課企画係長）、中西もも氏（東京大学大学院農学生命科学研究科 One Earth Guardians 育成機構准教授、URA）、光畑由佳氏（有限会社モーハウス代表取締役）など、多様な職種、多様な職場で活躍中の外部講師4名をお招きし、講演、パネル討論、ブレイクアウトセッション（質疑応答）の3本立てで会を進行した。

まず、4人の講師から、ご自身のキャリアパスについて、講演が行われた。

上坂充氏は、これまでの歩みを写真を交えて紹介しながら、「ダイバーシティあるキャリアパスである」と振り返った。学生時代は、東京大学原子力工学科・専攻において原子力構造工学研究に従事し、Wisconsin 大学大学院への留学も経験した。大学院修了後、石川島播磨重工業での勤務を経て、約20年にわたり、東京大学原子力工学研究施設ならびに同大学院原子力専攻において量子ビーム科学研究、加速器開発、医学物理研究を推進するとともに原子力人材育成活動を主導し、日本原子力学会会長を2期務め、2020年12月に内閣府原子力委員会委員長に就任した。この間、目指していた路線に必ずしも合致しない岐路に偶然遭遇することが何度もあったが、運命と感じ、新たな方向を受け入れた結果、世界が広がったことを実感したという。このような経験を踏まえ、若者に向けて「進路においては思うようにいかないこともあるが、それは、その時点の自分では考えが及ばない『広い世界』への歩みの始まりかもしれないので、何事にもチャレンジする気持ちで頑張ってください」とエールを送られた。

水戸晶子氏は、お茶の水女子大学理学部ならびに同大学院人間文化創成科学研究科博士前期・後期課程を経て、文部科学省に入省した。在学中は、糖結合タンパク質レクチンによる大腸がん細胞増殖抑制機構の研究に邁進するとともに、インターンシップ、教育実習、博士課程教育リーディングプログラム等での幅広い経験を通して、課題解決力や論理的思考力、調整力、忍耐力などを身に付け、その後の進路選択にも大きな影響があったと振り返った。文部科学省ではこれまでにライフサイエンス研究の振興や科学技術政策の取りまとめに携わり、現在は教育の情報化の推進を担当している。これまでに担当したプロジェクトを紹介しながら、若いときに幅広い経験をすること、その中で自分の核となる部分を見つけていくことが自身のキャリアパスを切り開くのに必要であると述べられた。

中西もも氏は、東京大学農学部ならびに同大学院から海外ポスドクへと生命科学研究者の道を歩んだ後、JSTの産学連携展開部の調査員を経て、現在は東京大学大学院農学生命科学研究科の教員と東京大学URAを兼務している。研究者から研究支援を行う立場へキャリアチェンジをした背景には、科学をもっと楽しめる社会にするための仕事がしたいという思いがあったという。研究プロジェクトの開始・実施を含む戦略的かつ多面的な研究支援を行うURAに求められるのは、大きなミッションに向かって自分で問いや課題を設定し、どうアプローチするか計画を立てて自律的に実行する力であり、それはPh.D.に求められる力とも共通すること、加えて、チーム力やヒトや組織をつなぐ力も求められると述べられた。

光畑由佳氏は、現在モーハウスとNPO法人子連れスタイル推進協会を運営しており、女性が仕事と子育てを一緒にやっていける方法を探索してきた人生であると振り返った。お茶の水女子大学卒業後、パルコでの美術企画、建築書編集者を経て、第二子の出産後に外出した際、電車の中で子供が泣き出し、その場で授乳をした体験がきっかけとなり、モーハウスを起業した。子育ての困難さを「環境」と「技術」で解決すべく、授乳服と子連れ出勤を通して産後の女性の新しいライフスタイルを提案してきた。現在、東京大学とお茶の水女子大学の大学院にも在籍し、子連れ出勤に関する研究も行っている。心理学者のHohn D. Krumboltz教授が1999年に発表した「Planned Happenstance Theory（計画された偶発性理論）」を紹介し、思いもよらない出来事や出会いがキャリアにつながるの、「好奇心」「持続性」「楽観性」「柔軟性」「冒険心」を持ち、自分が持っている無限の可能性を信じてあれこれ挑戦していく中で進むべき方向性を見出していくことが、これからの変化の激しい時代では重要になると述べられた。

続くパネル討論では、まず、各演者のキャリアに関連する質問に対し、回答をいただいた。上坂氏からは、1) 大学と霞が関の違いについて、2) 原子力分野における国際連携において研究職が活躍できる場について、3) 定年後のセカンドキャリアを模索する世代に向けての助言について、水戸氏からは、1) 行政職を目指そうと思った時期と文科省業務が自身の志と一致した点について、2) 博士卒で省庁に入省する場合のキャリア形成のメリットとデメリットについて、3)

これまでかかわった案件で世の中が変わりそうだと感じた事柄について、中西氏からは、1) キャリア選択においてどのような選択肢の中から何を考え決断したのかについて、2) 他の大学での URA の活躍の場について、3) URA の楽しさ・醍醐味と必要な心構えについて、光畑氏からは、1) 「子育てと職場をあえて分けない働き方」を研究機関や大学（特に実験を伴う研究職）に採り入れる場合の課題について、2) ビジネスをされて競争もある中で、子育てをしながらどのように乗り越えてこられたのかについて、3) 職種（例えば「放射線科学の研究者」）に“ついて回る”イメージが「働き方の柔軟さ」を邪魔するということはないかどうかについて、それぞれのお立場からコメントやご意見をいただいた。最後に、全ての演者への共通質問として、「所属される領域で、理系学生に求められることは何か？」について尋ねたところ、研究活動を通じた専門分野の知識の習得にとどまらず、一般教養にも広く興味を持ち、全体の中での自身の立ち位置を俯瞰することの重要性、異分野の人との交流の重要性、若い時期に失敗も含めた様々なチャレンジをすることの重要性が挙げられた。

最後に、4つのブレイクアウトルームに1名ずつ講師に入っていただき、参加者が好きなルームを選んで参加する形式でブレイクアウトセッションが行われた。小グループで対面する雰囲気の中、各講師との質疑応答や対話に花が咲いた。各ルームのレポートは以下の通りである。

ルーム1：ルーム1は内閣府原子力委員会・上坂充氏が在室された。大学院生から、原子力委員会の職務に関する質問があり、規制庁の仕事内容は縦割りと言われがちであるが、法律で定められているため当然のことであり、内閣府が研究と規制の横断的な役割を果たしているということを知った。また、シニア研究者から、キャリアを積み途中で嫌だったことがあったかどうかについて質問があり、嫌だったこともあったが、助けられて乗り越えることができたため、改めて「人」が大事であるという印象的なお話も伺うことができた。（ファシリテーター 藤通有希委員）

ルーム2：ルーム2は文部科学省・水戸晶子氏が在室され、若手研究者と大学院生より、それぞれの視点で多くの質問が投げかけられた。省内で多くの意見をまとめる調整役としての能力は、学生時代だけでなく社会人になってから日々培われていること、負担を軽くする工夫といった相手方への気遣いや顔を合わせてお願いすることの大切さ、その要となるのは日々の良好な人間関係の構築にあることといった社会人として大切な心がけを語られたことが印象深く、参加者らは多くを教わった。また、国の方向性や政策決定に関与できるやりがい、誰かの役に立ちたいという想いから進路選択をしたとのことから、その熱意とひたむきさに感銘を受けていた。（ファシリテーター 石川純也委員）

ルーム3：ルーム3は東京大学の中西もも氏が在室され、若手研究者と大学院生より質問があった。まず URA の仕事の必要性和認知度を広げるために、学内に URA がいて良かったという生の声を寄せることの大切さを伺った。続いて、URA の業務にも繁忙期はあること、博士課程に進む決断したのは、修士課程で「自分の研究」という意識が芽生え、研究が楽しくなったからとお話を伺った。最後に、ポスドクとして海外に行った経験は、研究面だけでなく、キャリアの考え方、家族と仕事の優先順位、研究室の運営の仕方など日本とは異なる価値観に触れて視野を広げてくれ、現在に活かされているという印象深いお話もあり、参加者らには大いに励みになった。（ファシリテーター 朝田良子委員）

ルーム4：ルーム4では、モーハウス代表取締役・光畑由佳氏に参加いただいた。セッション開始直後から、参加者の過半数が男性で占められていたことが特徴的で、男性会員からの関心の高さがうかがえた。子連れ出勤に関する議論が中心となり、男性の子連れ出勤の参加率に関する質問や、大学の講義において子連れの講師や学生を見かけた体験談などが話題にあがり、光畑氏からは、それらに対して、これまでのご経験も交えて、子連れ出勤が理解されるための的確なコメントや助言をいただいた。子育てに寛容的になってきた社会ではあるものの、未だ悩みを抱える方も多く、普段はなかなかできない議論を提供する有意義な機会であった。（ファシリテーター 砂田成章委員）

企画・運営：日本放射線影響学会 キャリアパス・男女共同参画委員会
委員長 細谷 紀子（東京大学）
副委員長 飯塚 大輔（量子科学技術研究開発機構）
委員 朝田 良子（大阪府立大学）
石川 純也（杏林大学）
砂田 成章（東京医科歯科大学）
中村 麻子（茨城大学）
藤通 有希（電力中央研究所）
吉本 由哉（福島県立医科大学）

後援：男女共同参画学協会連絡会
日本放射線影響学会若手部会・SIT ワークショップ準備検討小委員会